

# 「健康データ」1100人分集積

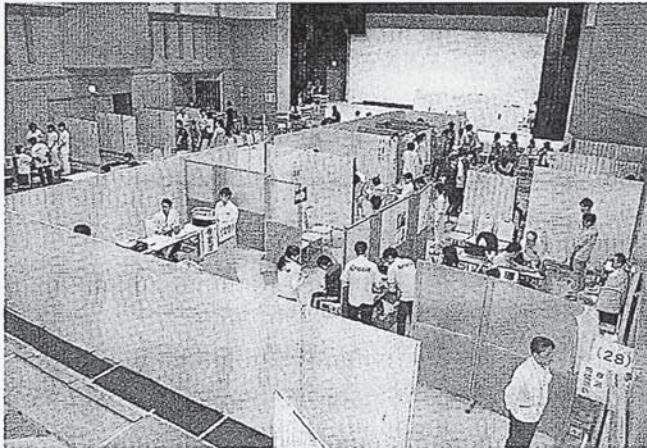
## 弘大など健診開始

### 短命県返上足掛かり期待

#### 弘前・岩木健康増進プロジェクト

弘前市岩木地区の住民を対象にした大規模な健康調査「岩木健康増進プロジェクト」の健診が26日、中央公民館岩木館と岩木文化センターあそべーるで始まった。短命県返上と健康づくりに向けて産学官民が連携して支える健診で、10日間で約1100人が食事、循環器、消化器など2000項目にわたる検査を受ける。住民自身が詳細な健康状態を知り、疾病予防や健康の維持につなげると同時に、世界的に熱視線を集める健康ビッグデータの集積を一層充実させる。

（成田真由美）



同プロジェクトは、地区住民の健康状態の現状把握や問題点の発見から健康の保持、増進を図ることで平均寿命アップにつなげようと、2005年度にスタートした。弘前大学は2014年度、産学連携により

社会的課題に取り組み文部科学省の「革新的イノベーション創出プログラム（COI事業）」拠点を採択された。これを機に、プロジェクトには健康づくりの拠点を指す同大COI事業の参画企業

が加わるようになり、検査項目も飛躍的に増えた。14回目となる健診は弘大、弘前市、県総合健診センターなどが連携して実施。弘前大学院医学研究科関係者を

はじめ、市、大学、企業、医師、ボランティア、ひろさき健康増進リーダーら産学官民から成る計約300人のスタッフが健診を支える。会場には花王、ライオン、カゴメ、クラシエなどヘルスケアで有名な大手企業関係者の姿も。弘大医学部に共同研究講座を開設したクラシエは冷えなどに

関する検査を、カゴメのフースでは野菜不足を判定する血中カロテノイド測定を実施した。このほかヘルスリテラシーや肝硬度測定、嗅覚検査、口臭など項目は多岐にわたった。弘大COI戦略統括の村下公一教授は、ビッグデータを活用した取り組みの現状として「糖尿病などを予測で

きるモデルができた」とあるなど、ビッグデータを使い弘前から社会、市民に貢献していく動きも出てきた」と成果を述べる。今回の健診では、超多項目から成る健康ビッグデータや10年以上にわたり継続するプロジェクトに注目した大手企業関係者、自治体などによる視察も予定されている。同日も大手企業関係者が訪れ関心を高めていた。

弘前大学院医学研究科社会医学講座の中路重之特任教授は、本県の短命県返上への起点になっているこのプロジェクトについて「産学官民という接点のない人たちがデータを解析したり、お互いの得意技を出し合い集まるプラットフォームになっている。目的は短命県返上であり、人を幸せにするということ。短命県返上と健康づくりに向けて歯車がつながり、流れができてくる」と話した。